

## 編集後記

お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報『ジェンダー研究』第5号をお届けする。執筆者、ならびに査読者の方々のご協力により、無事刊行のはこびとなった。

創刊号では模索する形でスタートされた年報も、2、3号でホーン川嶋瑤子ジェンダー研究センター客員教授に道筋をつけていただき、編集の中心が伊藤るり教授に移行した4号からは、編集方針・投稿規程も明文化されるようになった。また、表紙デザインもあらたになった。

このように雑誌の形が徐々に整えられることは、ジェンダー研究センターやジェンダー研究自体にとって確としたあり方や方向が見えてくるようでもあり、非常に喜ばしい。だが、揺るぎない形が築かれても、既成概念の固定化に疑問を差し挟み、しなやかで強い思想を育むための柔軟な姿勢を保つことが、ジェンダー研究には必要である。したがって、この雑誌が、けっして、ある種の地位を保持したり、掲載論文の多様性を減じることのないように注意していくことがつねに求められよう。

そういった意味において、本号の内容は、グローバリゼーションとジェンダーの見地からアジアについて書かれたもの、ヨーロッパやアジアの女性の移動について扱ったもの、歴史、健康、動物の権利論、美術といった分野におけるジェンダーの論考など、多様性に富んでいると言える。また、昨年にはジェンダー研究者にとって関心の的となる著書も多く出版され、結果的に書評4本の掲載となった。

依頼論文としては米国・ワシントン大学のタニ・E・バーロウ教授とフランス国立科学研究センターのミリアナ・モロクワシチ・ミュラー教授にご寄稿いただいた。それぞれ2000(平成13)年度、2001(平成14)年度にセンター外国人客員教授としてお招きした方々である。他にも研究協力員として昨年滞在されたパタヤ・ルエンカウ氏(ドイツ・ビーレフェルト大学)には論文を、東京大学の上野千鶴子教授には書評をご執筆いただいた。この場を借りて謝意を表したい。特に上野教授には、多忙きわまる中、急な依頼にもかかわらず快くお引き受けいただいたことに、心から御礼を申し上げたい。

本号は前号で実らなかった投稿論文の掲載が4本あった。今後も、学内はもとより、学外の研究者からのさらに質の高い投稿を期待する。また、次号より特集を組んで論文を集めることも考えに入りたいので、ご意見やご提案があればぜひお寄せいただきたい。

4号に続き本号でも、ジェンダー研究センター業務に追われ、センター専任教官および研究員による論文掲載がかなわなかった。次号への掲載をここに確約し、ことばを閉じたい。

編集事務局 長妻由里子